



蜜三昧(1)



性愛三昧

渚 まこと

蜜 三 昧 (1)

みつ ざんまい

蜜 の 報 酬

>

二月十六日。木曜日。

午後二時過ぎ。

藍染美香は小坂晃子から、電話で、ハニー・ジョブの指示を受けた。

「夕刻六時半。カフェ・レストラン・ウィルに来てね。今夜、江田邦男という好色男に抱かれて欲しいの。典型的なミドル・レベルの男で、小規模の五十二歳。先週の土曜日の昼下がり、私

工務店の代取よ。年齢は男盛り

がミートして味見したけど、ポテンツは並み以上で、並みを越えたボリュ

ームのペ*ス、ラブ・テクニク、淫らなスタミナ、隠れエロトマニアぶりもまずまず。懐は潤沢で、美味しい情事に使う金は惜しまないタイプだわ。容貌は精悍。贅肉のない琥珀色の男軀は意外なほど柔らかい。フェーク・ラブ、イコール、性快楽と割り切った分別をする男だから、約三ヶ月後に惚れ込んだ美香とミートできなくなっても、情痴のトラブルは起こさない安全パイよ」

「マアッ、味見にかこつけて愉しんだのね」

高級コンパニオン・オフィスで偽装した高級コール・ガール・オフィスを仕切るボス・小坂晃子は、芸大時代の先輩のレズ・メートだった。卒業後、数年の空白を経て性関係を復活させた経緯がある。

「成り行きで毒味して、私なりに吟味しただけよ。美香は哀麗な彫りの小貌、妖熟したプロポーションな女身、異能のセクシュアリティ、二度の出産歴が信じられない凄味の名器で男を籠絡する妖婦よ。必ず、彼は美香の虜にされてしまう。帰り遅くなっても、美香の二人の愛児のことは大丈

夫かしら？」

「心配ないわ。五歳の魅希、四歳の奈魅は、三ヶ月ほど前から同居する義母に懐いたし、義母も喜んで魅希と奈魅の面倒をみてるから……」

親族ではない年上の並木悦子のことを、愛人とは呼ばずに義母と呼んだ。

「三ヶ月ほど前といえば、美香がこの仕事を始めた頃になるけど、彼女は、今後ずっと同居するの？」

「義母はそのつもりよ。家を留守にしなければ仕事にならないから、子供の世話をしてくれる義母の同居は好都合なの」

さらっと答え、彼女との愛人関係を秘したがリンクを感じられたようだ。

並木悦子は亡夫と不倫関係にあった未亡人で、二年前半前、不慮の交通事故で夫を喪う前から親密にリンクしてきた愛人だ。夫はその事実を知らずに他界したことになる。三十二歳の美香より十七歳年上のはんなり未亡人は美香の義母でも、親族でもない。実年齢より十四・五歳若い妖婦の女身は極熟しているが、平常時ははんなり容姿を地味なつくりで抑え、亡夫の母、美香の義母の貌で世間の目を欺いている。美香との同性愛関係は完璧に隠蔽し、仲のいい義母娘関係を偽装している。

夫の生前から、夫と不倫関係を続ける悦子と緻密に気脈を通じ、濃密な愛人関係を続けてきた美香も、夫の没後、翌々日から押し掛け女房のよを受け入れ、亡夫の生母、美香の義母、魅希

と奈魅の祖母というラベルを貼って世間の目を欺いた。戸籍を調べられれにそんな詮索好き、酔狂な輩はいない。醜

聞かぬ漁る一部メディアも、利得がない小市民のスクランダルには牙を剥かない。

『愛しい分身の魅希と奈魅が懐いた並木悦子の同居は、ハニー・ジョブを生業にする私には渡りに船。信頼する伴侶・悦子の存在抜きでは現在の生活は成り立たない。彼女も、私の宝物の魅希と奈魅の祖母役を親身でこなしている。斜眼すれば、悦子に人質をとられたことになるけど……』

ハニー・ジョブを生業にする美香にとって、悦子は必要不可欠の存在だ。

五歳の魅希と四歳の奈魅も祖母と信じる悦子に懐き、美香自身も主婦の委ねている。留守中は無論のこと、日常の

様々なシーンで美香の代行をそつなくこなす悦子に絶大の信頼を寄せてい

る。事実を知らない世間の目には、美香の義母、魅希と奈魅の祖母として見られ、平常シーンでその偽装を見破られる危惧はない。

『過去の亡夫と悦子の不倫関係、私と悦子の同性愛関係は隠蔽されてきたわ。世間に、悦子との濃密な愛人関係を見破られるような下手打ちしない』

内心で不埒に強弁し、自らの生き様を露ほども恥じない。

>

午後六時半。

美香は、小坂晃子の指示通り、瀟洒なつくりのカフェ・レストラン・ウ

ここで江田邦男と会った。
「このカフェは素晴らしいけれど、和食に馴れた私には場違いな感じがし

て落ち着かない。懇意にする割

烹小料亭で酒と食事をしたが、いい？」

うに藍染家に入り込んだ悦子

ば容易に露見す偽装だが、周囲

ように有能な悦子に家事全般を

様々なシーンで美香の代行をそつなくこなす悦子に絶大の信頼を

て落ち着かない。懇意にする割

初対面を感じさせない不倫カップルのトークで誘われた。

洒落たフィールのカフェ・レストラン・ウィルでのディナーを楽しみにしていたがサラッと諦め、ボスである晃子が上客と折紙をつけた江田の誘った。

江田の話では、その割烹小料亭は徒歩で十数分の距離のようだ。

「車は？」

問うと、

「アルコールが入る時は運転しないことにしている」

と答えられ、タクシーで、江田が予約した割烹・御影へ移動し、小股の切れ上がったはんなり女将の案内で奥まった小座敷に通された。

割烹・御影のネオ和趣の小粋なたたずまいが気に入った。

『初見の江田との仮初めの不倫カップルが絵になっているみたい。時にはアルコールを楽しむのも悪くないわね』

一時間余、美味しい割烹料理と冷酒を楽しんだ後、江田の同意を得て美香が予約したシティ・シックなつくりの高級ラブ・ホテルへタクシーで移動した。

いを快諾して同カフェを後に

こんな小粋な店で、割烹料理と

>

藍染美香がハニー・ジョブで使うアン・アリアスは英田那弥。

美味しい情事の対価は、アドバンス・ペイメントがオフィスルールだから、江田から約束のハニー・フィー、万札二十枚を受け取った。美香個人の懐に丸ごと入る甘いチップは万札五枚を切ることはない。暗黙の約束を反故にする野暮な客はいない。ハニー・フィーの内の四十%は晃子が仕切るオフィスへのコミッションになり、万札十二枚と最低万札五枚のハニー・チップが美香の懐に入る。

一人の上客に費やす時間は平均六時間。

フェーク・ラブの味付けは必須。上客にセックス主体の濃密な情事を堪能させるハニー・ジョブは心身の消耗が半端ではないが、得られる甘い報酬も高額になる。

『極旨の情事に相応の対価を払う上客、リッチもしくは似非リッチな好色対価が高額であるかどうかは、個々の価値観と主観で異なるけど、セックス以外に金を稼ぐ特能を持たない私は他稼げない。両性を喰らうニンフォマニアの別貌を持つ私は、高級のタグがつくハニー・ジョブは性に合っているのかもしれない。ハードな中身だけど苦にならない。この三ヶ月の月平均の課税二人のリッチな好色男を相手にするケース

な男は意外なほど多いわ。情事の

の仕事ではその二十分の一も

されない甘い所得額は、一日に

が多いから、万札千枚を少し越えているわ』

エゴの強弁を恥じない。

だが、蜜の生業はリスクが大きく、精神的荒廃も避けられない。長い年月、続ける生業ではない、と認識している。

『哀愁な容姿な容姿で魅せる未亡人のたたずまいとは裏腹な別貌……濡場で頭わにする凄艶なニンフォマニアの生態は凄味、と悦子に折紙をつけられてるわ。でも、ハニー・ジョブのリスクは大きいから、私は大丈夫、と年余の実働を想定して蓄財すれば、必要コ

いう身勝手な過信はしない。三

ストを差し引いても二億五千万円はクリアできる……』

心身が健全でアクシデント、トラブルがなければ、淫乱な性情を活かせる蜜の生業で稼げば、三年間前後で蓄財目標額をクリアできる。執愛の悦子の存在が絶対要件になるが、描いた将来の生活設計は具現できる。

無論、再婚は想定の外。

戸籍上はシングルを通し、美香の表裏を知り抜いた悦子との同棲を続ける。義母役、魅希と奈魅の祖母役、忠節な愛人&淫乱な情婦役をこなしてくれる悦子の存在を組み込み、美容師の既得資格を生かすヘア・サロン経営を具現して生活の基盤にできる。

『私の淫蕩なバイセクシュアリストの別貌は今まで通り隠せる。ヘア・サロン経営を手堅く軌道にのせれば、ライフ・レベルを少しリッチな小市民イフ・レベルを維持できるわ。富裕種族にな

に抑えたミドル・クラスのラ

ろうとは思わない。強靱な愛絆で繋がる悦子を失うアクシデントがなければ、安泰な将来を約束される。裕俗種族の異性との不倫情事を密かに享樂し、ハニー・ジョブで得たノウハウで蓄財も増やせる。確かな選択眼で不倫相手をつくるのが巧い悦子の狡淫な情事も容認する……』

江田との蜜っぽい会話を絶やさずに、心裏で魔妖に独語した。

『双頭のスグレモノで悦子との女と女のファックを飽食していても、旨味なヘテロセクシュアル愉しみたい。セレブ種族のタフな隠れエロトマニアをセフレにしたい。無論、容姿はシックで並み以上が条件に入る。優しくタフな交尾上手でも、プアーな男、女に寄生するホストもどきの若い雄、セレブ男でもフェーク・ラブを本物と勘違いする幼稚な輩は真っ平御免だわ。私のエゴの流儀に背くから……』

内心で魔妖に眩き、プロの矜持を冴えさせ、愁艶な容姿と優雅な所作で魅せる未亡人・英田那弥になりきった。

十数分後、ラブ・ホテルをイメージさせないアーバン・クールなホテルの部屋にインした。

上客と値踏みした江田の目的は、当然、極旨の情事。ヘドニズムの美酒に酔い痴れての耽美なセックスが暗黙の約束事。

『自らの性を安売りする低俗な風俗嬢と同列にされたくないわ。高級のタグに相応しいレベルの極上の情事を保証する……』

矜持を冴えさせた。

部屋内のすべてがラブ・ステージになる。リビング・エリアもその内になる。

絶妙のタイミングで愁麗な彫りの小貌を凄艶な淫婦貌に変え、劣情を急裸になると、暖色系のムーディーなライティングでよりエロジナスに映えるプロポーショナルなボディを見せつけた。

速に高めた江田の視野の中で全

二度の妊娠・出産が信じられない自らの妖熟した細身に自惚している。りは二十歳前後のもの。身長168。B84・W60・H85のセクシュアルなボディ・シェイプに加齢を思わせる崩れがない。

蠟色の肌理の細かい皮膚の艶張

『濃密なセックスをエナジーにする私のエロジナスな裸身に魅了されないも魅惹する細身に自惚してるもの……』

男はいないわ。私自身、同性を

美香固有のナルシズムを疼かせ、エロスが香る全身から放つオーラで「絶品だ。エロチカなアートだ。眩しい……」

江田の劣情を煽った。

「嬉しい。舞い上がってしまうわ。エロチカなアートだなんて……」

蠱惑の眼差しでベッド・エリアに隣接したバス・ルームを指し、『私と同じように貴方も無垢になって、遅いペ*スを剥き出してポテン

ツを鼓舞して……』

と、アイ・ランゲージで挑発した。

好色なセレブ男は名器信仰が強い。この三ヶ月余間のハニー・ジョブで 交わったりッチな異性は四十数人
余になるが、セクシュアリティのコアに なる名器を自負する美香と交尾した上客を、例外なく、英田那弥
というド

ープにはまらせていた。

著しい性興奮で股間からペ*スを反り上げた江田を誘い、ハイクオリテ イなウエット・エリアに移った

。

コスメ&チェンジング・スペース、トイレを含むウエット・エリアの クオリティな内装、諸設備は一
流シティ・ホテルルのロイヤル・スイート に等しい。鏡面大理石組積とウォール・ミラーを組み合わせ
た壁面、パー ナー仕上げ御影石張りの床面、マット・ブラック塗膜仕上げの天井面、パ ー
ル・メタリック調の広いバスタブが絶妙に調和し、皮膚を綺麗に映えさ せるロゼ系のライティングが快い

。

コール・ガールの生業に染まって身につけた習性でボスの幌子から得た
江田の情報を反芻し、素早くボディ・プロフィールを読んだ。

身長175強。艶のある皮膚は琥珀色。多少骨太な感じだが、五体のバ ランスがいい。美香がイメージ
する小規模工務店の代取らしからぬ精悍な マスクは悪くない。真黒のヘアはショート。生理的に嫌な中年男
の脂ぎっ

たフィールがない。著しい性興奮で股間から逞しく反り上がったペ*スは
邦人男性の平均勃起サイズを大きく超え、その凶淫さから秘めるポテンツ を読める。長さ190ミリ強、
陰莖の直径30ミリ前後、極太感のあるグ ランスの刺激的な張出は平均8ミリ。痴淫なコイタスに目のな
い雌なら涎 を垂らすボリュームだから、性動が淫絶なマニアクな交尾も愉しめる。

『ディープ・スロートは無理だけど、私の極熟したカ*トにはお手頃サイ ズのコ*クだわ。凄味の淫乱女の
別貌を持つ幌子は本音の猥雑なセックス を愉しんだはず。彼女との女と女のコイタスの糜爛な中身は半端
ではない もの。私も彼女に引けをとらない隠れニンフォマニアよ。ビジネスと割り 切ってい
ても、性快楽は貪っていかほどのものよ。異常発情した江田には、 ニンフォマニアの別貌を剥き出した私の
本音と演技の見分けはつかないの だから、愉しまないと損……』

内心で、にんまりと北叟笑んだ。

江田とノン・ガード餓えた性獣のように苛淫に交わっても、HIV感染 とか諸々の性病感染の危惧はない
、と特有の勘で判別した。

『こんな上客を紹介してくれた幌子に感謝する。口を裂き広げてもディ
ープ・スロートできないボリュームだけど、ソープ嬢もどきの苛淫なフォラ チオ、ペ*ス折檻具にもなるカ*
トと相手によって変えられるセックス・ テクで江田を悶悦させてやる。必ず、英田那弥という極上麻薬に
中毒させ
てやる……』

自負心を疼かせ、淫猛に奮い立った。

バスタブの湯中でのセックスには馴れている。

淫らな眼差しと所作で江田をバスタブの幅広のエッジに腰掛けさせた。

『ウッフッフ、どのくらい耐えられれかしら？』

心裏で魔淫に呟いた。

「愁麗で淑やかな未亡人の那弥さんがこんなに淫らだなんて、信じられな
い。夢を見てるようだ」

「夢ではないわ」

湯中で江田の開かせた脚間に腰を沈めた美香は、右手指で、江田の左内 腿を優しくつねり、

「痛いでしょ？現実よ。貴男にぞっこんよ。本音で淫ら狂いしたい」

と股間から凶淫に反り上がったシンボルに囁きかけ、熱い眼差しではち

切れそうに充血したグランスを舐め回した。口を裂き広げても銜え込めな
い太いボリュームだが、おぞま
しさを感じない。平均八ミリ位の刺激的な
段差にぞくついた。色は皮膚の艶やかな琥珀色をかなり濃く
した感じ。凶
淫な猛りが秘めるポテンツを物語っている。江田に魔妖な愛しさを覚え、
『この種の愛しさはやばいわ。ハニー・ジョブの濡場なのに、気持ちが奇
妙に揺らめく……』

と、気持ちの邪淫な高ぶりを意識した。

「私、訳ありの未亡人なのよ」

上客に対する濡場のマナーの一つだから、トークの語調はわざとらしさ
のない睦言トーンを崩さない。

「エッ、訳あり？」

「そう、いけない訳があるの」

「どんな？」

江田が興味をつのらせた。

「答えるけど、その訳を知っても、私のことを嫌いにならないでね」

トーンに蜜味を効かせ、蠱惑の気を籠めた。

「もう私は那弥さんの虜にされた男だ。嫌いになるなんてあり得ない」

「虜にされただなんて、大げさね。私、淫らな性業を背負った女なの」

「淫らな性業？」

「私、ニンフォマニアの別貌を持つてるの。貴男のように淫らな気持ちが
フィットする素敵な男性に抱かれたら、眠っていた性業が覚醒してはした
なく淫ら狂いしてしまう」

偽りを睦言にした。

濡場で上客を手玉に取るのは容易いが、割り切れない罪悪感がつきま
とう。だが、女遊びに馴れたりリッチな好色男との痴癡な闘ぎ合いではその手
の罪悪意識は霧散する。甘淫な殺し文句を使って江田の自尊心をくすぐり、
隠した淫牙を顕わにした。

左手指で充血し尽くしたペ*スの根元を絞めつけ、グランスを舐め回し
ながら、

「こんなに素敵なペ*スを目の当たりにするのは初めて……。太すぎて銜
え込めないから、私流で愛撫してもいい？」

と睦言をからめ、江田を悦ばせた。

「那弥さんの好きなように舐めて……。もう私は、俎上の鯉だ。麗しきバ
ンプの素貌で魅せる那弥さん
のセックス・スレーブになりたい……」

一瞬、バンプ、という聞き馴れない言葉に戸惑ったが、

『女遊びに馴れた江田には、私のサド性を疼かせるマゾ性もある……』

と直感的に読みとり、美香自身も愉しめる上客だと思った。

『彼と幾度くらいミートを愉しめるかしら？ 二ヶ月間余で、十五・六度
くらいかな。それ以上親密なミートを重ねると、面妖な情愛が芽生えるか
ら危険。あくまでもハニー・ジ
ョブなのだから、本気が交じる色恋沙汰は
極めつけの愚行。上客に法度の情愛を抱くようになると、職分
を忘れた茶
番劇になるわ』

自らへの戒めを忘れない。

脳虐的なフォラチオとペッティングの術を身につけている。左手指で根
元を強く絞めつけて舌と両手指で執拗に舐り回し、射精寸前の悶悦を強い、
リードして異形の抱き地獄の体位で異常勃起を続けるペ*スを喰らい込む
と、江田の静脈が浮いた首に両腕を巻きつけた。

猥雑な腰動で湯面を意図的にざわつかせ、

「ウツウウ……」

と、悦呻する江田に絶頂を強いて多量の射精を強いた。

「イクツイクツイクツ……」

絶妙の間合いで痴淫にヨガリ、絶頂の余韻に浸る江田を恍惚のアクメの表情で魅せてから、湯中で身体を離し、まだ萎まないペ*スを両手指で愛撫した。

「烈しくイカシタのに少しも萎えていないわ。凄いポテンツっ。極太のグラランスが凄味……」

ハニーに囁きで江田を有頂天にした。

『私のプロ意識って凄いわ。自らの意識をコントロールして、カモにする上客を悦ばせる台詞を戸惑いなく囁けるのだから……』

自らに脱帽し、

『背後から淫絶に姦られたい』

と、ボディ・ランゲージで伝え、エロジナスな背中を見せてバスタブの幅広のエッジに両手をつけて異形のアニマル・ポーズをゆくった。

「いけない未亡人をアクメの鞭でしばいて……」

美香の扇情的な媚態に涎を垂らす江田を色魔と決めつけ、ヒップを突き上げた異形のアニマル・ポーズをつくった。

「貴男は隠れ色魔でしょ。色魔らしく淫乱な雌にお仕置きをしてっ。ウイドのいけない性根をもっと淫らにして……」

江田を色魔と決めつけ、挑発した。

「エロ雌の本性を顕わにした未亡人をバックから姦るなんて、罰が当たりそうな果報だ。男冥利につきる……」

江田の劣情の異様な高ぶりは意図通りだ。背後で立位になった江田にヒップを両手で掴まれ、坩堝と化した蜜壺をズルズルツと貫かれた。並みへの凶淫な猛りがたまらない。

「アウン、最高っ。太くて、長くて、逞しい……」

芯髄までめり込まされたような挿入感に痺れ、ヨガリ喘いで江田を悦ばせた。

遙かに超えるボリュームのペ*ス

>

美香はナルシズムが異様に強い。

実年齢・三十二歳より一回り若い哀愁美で魅せる容姿、哀淑なたたずまい……二児の受胎・出産歴が信じられないシェイプリーな女身、愁麗な彫りの小貌に自惚し、犯したくなるほど魅せられてる。

『柔軟な女体でつくる耽美なラーゲ、苛淫な性動は、俗にいうセクササイズよ。エロスが宿るシェイプリーな女身を保持するためのエクササイズを兼ねてるわ』

艶然とうそぶいて恥じない。

身長170。B85・W60・H87。二十歳代前後の肌理の細かい艶張りのある皮膚は透明感のある蠟色。ダーク・ブラウンのミディアム・ヘア。ナイーブな頸筋。なだらかなショルダー・ライン。二児を母乳で育てなかった半休型の乳房。エロティックに括れたウエスト。アップ・フォル

ムのヒップ。美脚モデル並みのセクシュアルなレッグ・ライン。ボディ・ミラーに映る自らの裸身に魅せられている。

『陵辱したくなるほどエロチカな女身だわ』

と、ナルシズムを疼かせた。

『私を薬物に例えれば、アップ系のハード・ドラッグよ。同性をも魅惹するウェヌスもどきの裸身に魅了されない男はいないわ』

心裏で、艶然と呟いた。

お全裸のままバス・ルームからベッド・エリアに移ると、シルキー・ロゼのライティングでよりエロジナスに映える女身を誇示するようにラウンド・ベッド上で仰臥し、粘っこい視線で美香の全身を舐める江田を挑発した。

「絶品だ。感動する……」

「貴男も素敵。男盛りのシックな容姿、タフでグレートなペ*ス、女を悦楽地獄に彷徨わすセックス・スキルは匠級……」

過剰に褒め、膝を半ばまで広げて扇情的ポーズをつくり、秘淫な股間に江田を吸い寄せ、妖光を宿した眼差しで誘った。

『口と手指でいけないブ*シーををいたぶって……』

淫血を滾らせた江田の口と手指で、呆けるほど秘部を嬲弄されたい。数分間、バス・ルームで口姦、指姦され、江田の淫貪なオーラル・テク、フ

フィンガー・テクがますますな

『約三ヶ月間、フェーク・ラブを愉しみ合う男よ。口と手指のラブ・テクをしかと吟味したいわ。高額マネーを使う江田にも、私固有の淫ら狂いのセンス、異様に発達した性感帯、神経が剥き出たように鋭敏なクリトリススポットを吟味させて、怒り狂ったペ*

ス、たわわに熟れた膣前庭の性感

スを喰らい込んで発達した膣周囲筋、括約筋、名器を自負する女性器の情報を江田の記憶回路に刻みつけたい……』

甘い蜜の利得は、極上の情事の対価を惜しまない上客に性享楽を堪能させて得る当然の高額報酬、と割り切っている。

『背徳フィールの性愛に相応のコストが掛かるのは常識よ』

その仕組みを忘れたら、ハニー・ジョブは成り立たない。

「哀淑なたたずまいが冴える未亡人が絶品の淫乱女だなんて、罰が当たりそうな果報だ。猥褻に愛しても怒らない？」

「私、猥褻、大好きよ。本音で惚れた貴男に卑猥に愛されて、卑猥にヨガリ狂いたい……」

本音っぽい台詞を江田の性炎に注ぐ油にした。

『性成熟女性の性餓と愛餓は別物よ。性愛の定義は限りなく曖昧。愛の裏付けがなくてもセックスを愉しめるし、当人の性愛観次第でハニー・ジョ性を高く売るか、安く売るかは当人の性意

ブそのものを愉しめる。自らの

識と性能力、価値観の問題。私につけられた高級コール・ガールのプラチナ・タグは伊達ではないわ。自らの性を安く売る巷のセックス専科の風俗嬢と同列にしないで……』

ハニー・ジョブはビハインド・ワーキング、というコンプレックスはなく、プレシヤス・コール・ガールのプライド、矜持、流儀を持っている。

『ハニー・ジョブ・シーンでは哀淑な未亡人から凄艶な淫婦に化けて淫乱な本性を顕わにし、セックス主体のフェーク・ラブの高額対価を惜しまない上客に極上の性快楽を堪能させるのが私の流儀よ。無論、私も本音半ば

で愉しむ。金に糸目をつけない上客をヘドニズムの美酒で酔わすことに罪の意識は伴わないわ。本音をつけ加えれば、万札とセックスするような快感がたまらない……』

脳裏では、
『蓄財の目的を持つ私…… 異能与自負するセクシュアリティと、エロチカに熟れた女身を自負する私にとって、自らもヘドニズムの美酒に酔い、高額報酬を得られるこのハニー・ジョブ以上の生業はないわ。リスクは相応に大きいけど……』

と、身勝手な開き直りを恥じない。
プラチナ・タグをつけていても、所詮はセックス・ビジネスなのに、
『金を稼ぐ知恵のない低俗なガーリー達とはレベルが違うわ。月と鼈の違い、といえば傲慢な例えになるかしら……』

と、独善の格差意識を冴えさせた。

美味しい情事に掛かるコストを惜しまないリッチな江田は、エロチカに麗熟した女身と、その淫熟の性に目がない男だ、という美香の読みに狂いはない。約三時間。美香自身も淫らな本音を織り交ぜ、上客のラベルを貼りたい江田と白日夢さながらの耽美な情交に耽った。

どんなラーゲでも応じられる江田とからんだ体位を古典・枕絵本表四十八手の体位に当てはめると、七様態のからみに分けられる。美香が立ち位置弄される立ち花菱、ベッド・サイドのウォール・ミラーに映り込む猥雑な情景を愉しみながらの乱れ牡丹、好きな体後から鬪姦される仏壇返し、刺激的からみのつり橋、マニアックなからみの帆かけ茶臼、馴れた逆位を甘受して上向った立位の江田に虐姦される松葉崩し。

タフネスな江田のエロトマニアぶりは、世辞抜きで褒められる。繋がったまま二度の小休止を挟んだが、挿れごたえのあるボリュームのペ*スは射精を重ねても萎えなかった。

『私に気付かれないように、二時間から三時間エフェクトが持続するクスリを使ったようだわ』

推断したが、この程度の違法薬物は素人でも容易に入手できる。禁男性の強いハード・ドラッグに類別される違法薬物ではない。加齢によるポテンツをクスリでカバーする好色男は掃いて捨てるほどいるから気にならない。避妊手術を受けた身だかノン・ガードで客と苛淫に交尾んでも、受胎の危惧は皆無だ。

『性鎖したボスが私の嗜好に合う上客…… 美味しい情事の高額対価を惜しまないリッチな好色男を選んでくれているわ。哀淑な未亡人のたたずまいを売りにする隠れニンフォマニアの私…… ボスに刷り込まれた高級娼婦の矜持を持つ私の術中にはまった江田もその内の一人よ』

セックス主体のフェー・クラブを心得た男で、底なしの性欲、タフで凶淫なペ*ス、発情した淫蕩な雌が涙喜するポテンツに脱帽する。

『極旨情事の高額対価を厭わない江田のセクシュアリティ、隠れエロトマニアぶりはパワフルでトルクフル。その上、性快楽に貪欲な成人男女の淫らな遊びを心得ているから扱いやすいわ。私の方から指名を望みたい上客ね。でも、今後、予測できる江田からリピートされる密会はすべて悪縁を絶てない小坂晃子が仕切るプレシヤス・コンパニオン・オフィス…… 高級

で江田の口と両手指で痴猥に淫
位の一つになるよどり越え、背
きに露呈させられた秘股に跨が

コール・ガール・クラブを通してヘコミッションを納める。決して、その掟は破らない。晃子のバックに控える売春コネクションを甘く見るときつい報復を受け、密かに私を優遇する 晃子の貌に泥を塗ることになり、私は掟破りの無慈悲な報復を受けることになるから……』

表からは見えない売春コネクションのブラック・パワーを知り、その闇組織の掟を破ったコール・ガールが組織の非情の報復を受けた例を知っている。悲惨な結果を招く法度破りはタブーだ。そのタブーを犯せば、組織の秘密保持のために偽装失踪で口を封じられる ケースも想定しなければならない。

個人を対象にした高級コンパニオン紹介オフィスの体裁をとる高級コール・ガール・クラブの実態は、同クラブに属する個々の女性には分からない。体調不全、諸々の疾病を理由にしてハニー・ジョブを休むのは自由だが、この組織の属性を絶つのは至難だ。

『私の場合は、オフィスを仕切るボス・小坂晃子と愛人関係だからなおさら、晃子との約束を破れない。三年間余、私の意思でこの生業から足を洗うことはほぼ不可能だわ。でも、彼女との悪縁……異形のサフィズムを続ける条件付きで、違約金に相当する金で話はつく。蜜の職歴を縮めて封印できるけど、まだ蜜の生業に決別するつもりはない……』

常に安全第一の賢い分別を狂わせない。

ラブとライクは似て非なるもの。疑似情愛すら入らないハニー・ジョブの現場で呑む性快楽の美酒の味わいは格別だ。美香自身も本音半ばで痴癡を極める情交に耽り、万札という葱を背負った鴨、を美香固有の妖蜜漬けにして美味しく頂いた。

無論、プロの矜持は片時も掠れない。

魅せるアクメの所作も無意識の演技の内に入る。エロトマニアの別貌を剥き出した江田を最愛の男に仕立てる睦言、淫ら狂いに欠かせない原色の睦言が異様なまでに冴え、白日夢のような情交で得られる 性快楽を江田に堪能させた。

数分の小休止を挟んだ後、江田とバス・ルームへ移った。

シャワーとボディ・ソープで江田の褐色の裸身を洗い流し、ペ*スを愛撫するように洗浄して勃起させ、バスタブの湯中に入った江田に自らのロゼ艶が残るシェイプリーな裸身を見せつけながらシャワーを使い、秘部を念密に洗浄した。

「貴女に惚れ抜いた。まだ白昼夢の中にいるようだ。是非、明日の夜も逢いたい……」

予期通り、密会の約束を切望された。

「嬉しいけど、明日は所用があるから無理だわ。来週火曜日なら、素敵な隠れ色魔の貴男と逢引できる。オフィスのルールだから、必ずオフィスに話しを通してね。逢引の時間と場所は私の方から連絡するから、プライベートに使うスマホの番号を教えて……」

受け取った名刺の裏にその番号が記されていた。

白昼夢もどきの情交で親密度を著しく深めた江田とのトークに、妙な飾り気は必要ない。淫密な気脈が通じているのに、言葉を飾ってトーンを改めると逆に白ける。フェーク・ラブでも、本物っぽい演出は不可欠だ。

「私、もうタフな色魔の貴男にぞっこん。貴男のタフなペ*スの虜にされたわ」

江田を有頂天にさせる睦言を囁いた。

『これから三ヶ月間前後でこの男から稼げる限度は、ボスに内密の高額ハニー・チップを含めて万札千枚程度かしら……』

プロ意識が冴え、心底で冷静に先読みした。

琥珀彩の知恵 (1)

>

二月十七日、金曜日。

午前一時過ぎ。

冷え込みが厳しいが、ハイクラス分譲マンション七階の藍染家のリビングは快適に空調されている。子供部屋で休む二人の愛児……五歳の魅希と四歳の奈魅は熟睡しているようだ。

自宅リビングで並木悦子とくつろいでアルコールを愉しむんのは五日ぶりだ。彼女を場面に応じて、義母を意味するママ、実名の悦子、と呼び分けている。無論、非親族。美香の分身の魅希と奈魅は、若い祖母役を親身でこなす悦子を亡父の生母と信じて懐き、オーママと呼んでいる。

『何れ、魅希と奈魅に、秘した真実を話さなければならない。世間の目を欺くために執愛の悦子を義母に仕立てた事実を魅希と奈魅に知らせる時期はかなり先になるけど……』

執愛の悦子は必要不可欠の伴侶だ。将来の生活も、悦子の存在抜きでは成り立たない。

『嘘も方便よ……』

罪悪意識は欠片もない。

『悦子は幾つもの役柄をこなす芸達者な女優だわ。日常のメイクとファッションは私の義母、魅希と奈魅の祖母らしく多少地味に抑えてるけど、極熟した女身、練熟のセクシュアリティは絶品。レズビアニストが一度でもその気になった悦子と肌を合わせたら、間違いなく悦子の虜にされてしまう。ヘテロセクシュアルの場面でも然り。悦子の凄味の名器の虜にされない男はいない。長年、悦子と濃密な性関係を続けていた亡夫も例外ではなかったわ。呪わしいほどの淫業を背負う私が離れられない女だから、当然だけど……。勿論、私の表裏のすべてを知り、私の愛しい二人の分身を人質同然にした芸達者なはんなり奸婦・並木悦子の私への執愛念は命を賭しているように思える。ラブ、ライクを越えた私と悦子の執愛の因縁を絶つのは、命に関わるアクシデントがない限り不可能に近いわね。我が命を絶つに等しい悦子との絶縁を想定する瞬間もない……』

妙に艶やかな悦子の哀淑な彫りの小貌を見詰めながら、表面上は穏やかな悦子との極密な愛人関係を反芻した。

「魅希と奈魅と家のことを悦子に任せっきりだけど、変わったことはなかった？」

「何時も通りよ。家事は好きだから苦にならないし、可愛すぎる魅希と奈魅の祖母役を担えて幸せだわ」

「魅希と奈魅は悦子を亡父の母と信じて、はまり役の祖母を演じる悦子にすっかり懐いてる。魅希と奈魅は悦子が私からとった担保なのに、真の親族のように親密だから妬けるわ。略奪された感じを否認ない……」

「マアツ、略奪だなんて不適切な言葉ね。藍染の非親族の私にとって、愛する美香の分身の魅希と奈魅は孫に等しい存在よ。秘した事実……美香と私の愛人関係を露ほども知らない世間は、藍染家に棲人になった私と女当主の藍染美香の間柄を仲の良い義母娘と受け止めて、美香の分身……魅希と奈魅の祖母と受け止めてるわ。使う言葉を選んで……」

真綿で首を絞めるような悦子の言葉に逆らうのは止め、悦子がつくったウイスキーの水割りを味わいながら、

「ウフフツ、久しぶりに二人でアルコールを愉しむのよ。言葉の綾は酒の肴だから怒らないで……」

と甘えた口調で答え、妙に艶っぽく上気したはんなり奸婦の小貌をさらっとした眼差しで舐めた。

ウイスキーの冷たい水割りの喉越し感が快い。

悦子と同じように賢くアルコールに酔う術を会得している。日常的なトークに少しスパイスを効かせる事も忘れない。

「性悪なスパイスは効かせないでっ。美香から魅希と奈魅を略奪したという言葉は不適切だわ。私のまやかしのない愛情を純真な心身で受け止める魅希と奈魅は私をオーママと呼んで、祖母と認めてくれてるのに……」

「だけど、魅希と奈魅にオーママと呼ばれる悦子の方が私より賢母っぽい場面が多いわ。躰という美名の下で魅希と奈魅を洗脳して、濃密なスキニップを織り交ぜて手懐けた狡猾さに舌を巻く……」

悦子の小貌からわざと視線を外し、面妖な嫉妬を皮肉気味の言葉にした。

「魅希と奈魅の親身な母親代わりをこなし、幼稚園では魅希と奈魅の保護者祖母役をこなし、女当主・藍染美香の代行する義母役をこなす肉親以上の忠節な献身を信じないなんて、酷過ぎる……」

紛れもない事実を言葉にされ、切り返す言葉を失った。

通常時の悦子は、フェイス・メイク、ヘア・メイク、ドレス・デザイン等を多少地味に抑えているが、艶やかに女盛りを続ける女身は実年齢四十二歳より一回り半は若い。公私の外出時もファッションをさり気なく地味に抑えた哀淑なフィールづくりが巧く、決して華美なオーナメント……ジュリー、時計、リング、イヤリング、ネックレス等は選ばない。特に和洋を問わないセレモニー・コスチュームは、愁麗な容姿をより映えさせる。

生来の不生女で受胎体験のないスレンダー・ボディのサイズは、身長一六九、B八三・W六一・H八五。二十歳代前後を想わせる弾力のある絹肌は蠟白色。小貌の彫りは哀麗。ミディアム・ヘアは艶のある濡れ羽色。綺熟したスレンダーなボディには加齢を感じさせる弛みがなく、妖気が交じ

る色香が悩ましい。

『私と悦子は生来の性業を背負う同じ穴の狐……互いの性をエナジーにする同類の性獣よ。呪わしいまでに強靱な絆を絶てないわ。愛の正体は妖怪よ。私はその妖怪に取り憑かれた雌だわ。私と悦子の遺伝子にはどんな特異情報が書き込まれているのだろうか？』

疑問符をつけても解き明かせない。

美香と類似の性業を背負う悦子も愛する美香の性を淫貪に喰らう性獣雌だ。三十歳前後で加齢を止めたエロチカな女身をキープするための秘薬でもある。執愛する美香とのセックスを欠けば、生理的に変調をきたして正常な思考が狂い、魅せる哀婉な容姿が陰ってフェミニンな芳香まで霧散してしまう。悦子にとって、執愛する美香のセクシュアルにはハード・ドラッグのエフェクトがあり、悦子自身もそのアディクトだと自認している。『私は美香という秘薬抜きには生きられない雌よ』

言下にいい切る。

金を稼ぐ方便にした蜜の生業……ハニー・ジョブで白日夢もどきのセックスを飽食し、上客に望まれる仮初めのフェーク・ラブもビジネスの内と割り切って愉しんでいるが、執愛の悦子との濃密・痴淫なメイク・レズには執愛念の裏付けがあり、性愛行為の本質が異なる。当然、得られる性快楽の質はビジネスと割り切るハニー・ジョブで得るものとは月と蠶の違いがある。

一昨深夜、ベッドで悦子に囁いた睦言を思い起こした。

『私も悦子と同じよ。三日間も悦子と肌を合わさなかったら女盛りの体調が狂って、肌の色艶が褪せ、生理的なりズムが微妙に乱れる。固有のプロ意識、矜持が掠れて、ハニー・ジョブの切れが鈍るわ』

執愛の悦子との性生活が生活の基盤になっている。数年先を見据えて描いた生活設計には悦子が組み込まれている。

『図太くしたたかな生き様をする私と悦子は、互いに心臓を鷲掴みにしたツインよ。互いの表裏のほぼすべてを知り、弱みになる秘密、アキレス腱を知っている。裏切りは死、という執愛関係の怖ろしさを知っている』

肉親以上の存在になる悦子を不慮のアクシデントで欠けば、蜜の生業で蓄財する美香のライフ・スタイルは崩れ、描いた将来の生活設計も崩れてしまう。無論、悦子を祖母と受け止めた二人の分身……成長過程の魅希と奈魅に及ぼす影響は計り知れない。内心で仮想し、スツールから美香が腰掛けたソファの左側に移った悦子の妖気を感じて鳥肌立った。

「美香の眼差しが妙に潤んでるわ。いけないハニー・ビジネスでは美味しいアクメを食られなかったの？」

「悦子のバカ。高級娼婦を自負するプロの私が本音でアクメを食る、と思う？二十歳代に三年前後の高級のタグが付くソープ嬢歴がある悦子は、客と交尾む都度、本音でアクメを食ってたの？」

あけすけに切り返した。

「あくまでも魅せる演技半ばのアクメよ。高級ソープ・ランドの個室で私

の手練手管におちた男盛りの色魔もどきの客、来店の都度、必ず私を指名する色情狂もどきの熟年男、クスリでポテンツを萎えさせないエロトマニアもどきの初老男に、四度、五度と痴癡な交尾を求められる場面が少なくなかったわ。一日に私が受ける予約の臍眞客は平均三名。三人の客と十五度前後も交尾する日も珍しくなかったわ。セックス・ビジネスの中身がハードだから、一週間に三・四日は休んでいた。客との交尾の都度、本気でアクメを貪っていたら身が持たない。オリエンタル・フィールのソドムをイメージしたあの高級ソープ・ランドの個室では、分別盛りの男でも例外なく性獣のように発情してたわ。金銭感覚も狂って、高額追加料を承知の上でお遊びの時間を延長し、例外なく淫らな演技が冴える私に高額チップを弾んでくれたわ。私にフリークしたカモ客とは店外逢引も断らなかったから、三年余で三億八千万ほど蓄財できた……」

「見かけとは裏腹にタフな悦子のソープ嬢歴を聞くの初めてよ。およそのことは分かっていたけど、ジョブの内容は相当ハードだった……」

「エイズとか諸々の性感染症のリスクの大きいビジネスよ。精神面の荒廃も避けられないから、あの仕事を続けていたら間違いなく自潰してた。初老の馴染み客……妻を亡くした中産階級階層の男の後妻の座を得て、限界ぎりぎりであの業界と決別できたわ」

「悦子に幸運をもたらしてくれたホワイト・ナイトね。後妻の座を射止めた翌年、底なしの性欲を持つはんなり奸婦を後妻にした彼は、悦子との夫婦のいとなみの最中、疑惑の急性心筋梗塞で他界した……」

「疑惑という言葉はいらぬ。私の救命処置、事後対応は適切で過失の罪にも問われなかったわ。当然、合法の遺産相続を……」

「幸運が重なった……」

「約六分の一相当の相続よ。金額に換算すると一億四千万余。プラス、私だけが知っていた彼の隠匿資金は、全額、密かに利得したわ。額は八千万弱……」

「セレブな富豪未亡人として優雅なシングル・ライフを楽しめるのに、何故、私と一緒にになったの？」

「ウフッフツ、愚問ね。私は執愛する美香とのツイン・ライフでないと嫌。優雅なシングル・ライフは退屈で寂しいから願ひ下げ。美香と結ばれる因縁、美香と執愛の鎖で繋がる命運だったのよ。不生女の私は分身をつくれぬけど、美香の分身の魅希と奈魅は私の分身と錯誤するほど愛しいわ。日々が充実していて、凄く幸せ……。唯一の危惧は、美香のリスクの大きいハニー・ジョブよ。H I Vとか、諸々の性感症が怖ろしい。美香がその不運にみまわれたら、美香と私と魅希と奈魅の幸せな生活が崩れてしまう。美香が大きなリスクを承知の上で稼がなくても、私の蓄財資金で美香が描く生活設計は実現できるわ。美香と私は同化したツインだから、美香は私の蓄財資金を使う負目など抱く必要はないのに……」

「悦子との力関係は五分五分でありたいの。数年後の生活設計を具現するための手段として、リスクを承知の上で高級コール・ガールという生業を選択したのよ。蓄財目標額をクリアするまでやり遂げたいわ。運命の女神のさじ加減次第だけど、私の選んだ手段が反社会的も、その強い想いを折らないで……」

「分かった。私もあの時期のことを思い出すと、芯髓が妙に疼くわ。でも、常に大きなリスクを背負っていたことを思うと、今でも逆毛立つ。細心の

注意をはらっていてもリスクは減らないのだから……」

「肝に銘じてるわ」

「いっそ、私が高級コール・ガール・英田那弥の身を買おうかしら……」

「時代劇映画の花魁の身請けみたい？悪い冗談はやめて……」

「本気よ。美香の愛人が仕切るオフィスを通さずに、今深夜、私が源 氏名・英田那弥を買いたい。絶品の高級娼婦・英田那弥が得る蜜の報酬は、美香の蓄財目標額と同額……」

「悦子の馬鹿……」

「藍染美香には無限の価値があるわ。勿論、美香の分身、魅希と奈魅もコミよ。申し訳ないほど得をする買い物になる……」

「悦子の蓄財資金が大きく減るわ」

「大丈夫よ。週に一度、ミーとしている富豪老人から相当額の金を塗り取ってるから、蓄財資金はさほど目減りしないわ」

「マァッ、あの富豪の春画コレクターの色情狂老人・萬田剛士から塗り取ったの？」

「塗り取るだなんて人間性が悪い。情交の際はクスリで衰えたポテンツを蘇らせる七十七歳の萬田剛志は、まだ発情した雌をアクメ漬けにできる性豪老人に化けることを知ってるでしょ」

「ウフフッ、クスリのエフェクトが凄いわね。まるでセックス亡者……」

美香も悦子に誘われ、一度、クスリでポテンツを蘇らせる彼と悦子と耽美な三つ巴の乱交を愉しんだことがあり、春画収集とセックスを生きがいにするかのような富豪老人のエロトマニアぶりには二重丸をつけた。プライベートのバールで包んだ耽美な乱交は、平日の魅希と奈魅が在園中の時間帯を選び、世間からほぼ完全に隠蔽された織田家の別邸のゲスト用寝室をソドムに見立て、三時間半前後、性快楽の美酒に酔い痴れた記憶はまだ生々しい。

悦子が設定した美香の役柄は、インセストでリンクした悦子の異母妹。

桁の違う富豪・好色老人に執心され、

『愛人役の報酬は欲しいだけ渡す。悦子と同じように私の愛人になって欲しい……』

と、強く口説かれた。

『インセストでリンクした異母姉の悦子を恋敵にしたくないわ』

富豪老人の傲慢な口説きに嫌気がさし、悦子が演出した近親同性愛の味付けを濃くして断った経緯がある。セックス・ビジネスの内、と割り切ったハニー・フィーの裏付けのある情事は厭わないが、元・経済界重臣という一流の経歴、特権意識が染みついた容貌、傲慢な言動には馴染めない。

「彼に、美香を交えた情事をせがまれてるわ。美香の妖熟した細身、練達のセックス・スキル、ペ＊ス拷問のような名器を忘れられなくて夢想するらしい。明後日の真昼間、私は織田とミートするから、ハニー・ジョブの内だと割り切って、三時間余り、私と一緒に……。彼から預かった美香に渡す万札の五束は、そのまま私の部屋のサイド・ボードの引出しの中にあるわ」

内心で、損得勘定をした。

『三時間余のハニー・ジョブで万札五〇〇枚、懐に入る。でも、萬田剛志の情婦の一人になる、という暗黙の契約が成立する……』

利己優先の気持ちが揺らめき、
『一応、萬田剛志の情婦になり、様子を見てみようかしら。悪縁を復活させてリンクした小坂晃子……高級コンパニオン・オフィスを仕切る麗しきボスとの約束の期限は三年間余だから、オフィスと縁を切るのには知恵がいる。彼女のバックには売春シンジケートが控えているし、晃子自身もその組織の幹部の一人だわ。ビハインド・パワーを持つ闇組織に刃向かうように決別すると、怖い報復を受けるのは火を見るよりも明らか……。晃子との愛人関係を壊さずに金で話しをつける方が賢い選択になる。暫定的に萬田剛志の不定形情婦というの首輪をつけて、気になる彼のとの相性を吟味し、利得が現在より増えるかどうかを見極めてみよう。二ヶ月間前後、彼に飼われる情婦役を演じながら、確実に稼げる現在のハニー・ジョブを続けられればいい……』

利己の分別をしたが、揺らめく内心を悦子に見透かされた。
「萬田剛志は私の思惑通り、リンクした私と美香……二人のウィドウは訳ありの異母姉妹というフィクションを信じ込み、愁麗な容姿が冴える隠れニンフォマニアの美香への執心が異様に強いわ。エロスが宿る美香の女身と異能といえるセクシュアリティは、色情狂老人を奮い立たせる強烈な麻薬になる。ラブ・ステージで、意を一つにした美香と私が、彼の心魂までとろかすのは容易よ。気脈を緻密に通じる私と美香……インセストでリンクした異母姉妹という虚偽設定を信じ込む富豪老人を淫牙の餌食にしても、道義上の罪悪感も覚えない。腐るほど隠匿資金を持つ萬田剛志を金脈にする背徳の図式をイメージすると芯髓が妖しく潤んで、悪徳の栄え、を実感する……」

「異母姉妹という設定の悦子と私、彼の主観では、愁麗、哀淑な容姿で魅せる未亡人になるのかしら？」

「戸籍上は他人でも訳ありの麗しき異母姉妹、という虚偽設定を真に受けた彼は、インセストでリンクした異母姉妹のプ*シーにペ*スを挿れる果報に呆け、アップ系ハード・ドラッグに等しい藍染美香の真性アディクトになる、と太鼓判を押す……」

悦子の蜜の囁きが芯髓に染み、ヴァギナがキュッと収縮した。

萬田剛志を手玉にとったはんなり奸婦の言葉には妙な説得力があり、
『籠絡の奸淫な知恵、手練手管に長けた毒婦にハンティングされてるみたい……』

と、心裏で呟いた。

悦子は身体をフィットさせるのが巧い。湯上がりの裸身を純白のバスローブで包んだ二人の淫らな気脈は通じている。僅かな温度差もない。バスローブを着けていても、互いにノン・インナーの裸身のすべてをリアルにイメージできる。

「このソファで美香とからむのは久しぶり……」

ハニーに囁かれて優しく抱かれ、
「美香を高く売る術は心得てるわ」

と、囁きを重ねられた。

「萬田剛志と悦子と私の三つ巴の性宴は、まだ、一度だけよ」

「でも、彼は美香と幾度も淫絶痴癡に交尾んだわ。美香も彼のクスリで異常勃起したペ*スを淫蕩に喰らって、彼の脳裏に、美香の異能のセクシュ

アリテイ、凄味の名器を刻みつけた……」

「悦子の思惑通りに推移するかしら？」

「私と美香はインセストでリンクした訳ありの異母姉妹、というフィクション半ばの設定がヒットしたのよ。そして、美香のエロスが宿る妖熟の女身、異能のセックス・スキル、ペ*ス拷問具にもなる凄味の名器、底知れない性欲を知った色情狂老人は、悪魔に魅入られたかのように美香の虜にされたわ。萬田剛志は加齢で衰えたポテンツを蘇らせるクスリを常用しているけど、異様に偏執性が強い色情狂老人よ。間違いなく藍染美香という極上麻薬のアディクトになるから、美香との至極情事の都度、高額対価を厭えない立場になる……」

「私にとって、萬田剛志との性関係は、未知のパトロンと情婦という構図になるわ。蓄財の手段と割り切れるかしら？奇妙な男女の情愛が芽生えないかしら？」

「不安なの？」

「彼の情婦歴が長い悦子のように割り切れるかどうか、自信を持ってないわ」

「嘘つき。内心では自信満々のくせに……」

「悦子の意地悪っ。セックス・ビジネスのプロの矜持とノウハウを持っていても、閨房の匠職人、と折紙をつけたいはんまり奸婦・並木悦子には及ばないわ。蓄財の方便として生業にしたハニー・ジョブ……高級のタグがつくコール・ガールを生業にして磨いた淫らな手練手管、ノウハウが役に立つかしら……」

「そんな危惧は無用だわ。美香に魅入られた超富豪の刻印がある色情狂老人は、もう美香にとって俎上の鯉同然。私の異母妹と信ずる美香……濡場でニンフォマニアの別貌を顕わにす愁艶未亡人にさばかれる身よ」

「いわゆるリッチな好色男を相手にしてるけど、萬田剛志のような大物に比べたら富裕レベルはずっと下がるわ。私には未知の富豪老人だから、淫らな籠絡に手慣れた悦子のように手際よくさばけない。悦子の阿吽の呼吸のサポートが欲しい」

「分かっている。ヘドニズムの美酒に酔い痴れる性宴では、美香が彼を扱い馴れるまで、必ず私がからむから大丈夫……」

「彼と密会するのは、月に幾度？」

「三度、ないし四度。美香にドーブした彼にせがまれ、欲に目が眩んで頻繁にミートするのは美香の価値を下げる愚行になるわ。美香の高額対価をより上積みしたい私の意図に反する。萬田剛志と美香を単なるパトロンと情婦という図式にはしない。私を介さないと、彼が自負するマネー・パワーだけでは美香を抱けない構図をつくるの。藍染美香という禁断性の強い極上麻薬のアディクトと化した彼は、美香と交尾したい飢餓を充たしたい欲望に駆り立てられて禁断症状に陥るから、私がさり気なく示す美香の高額対価を無条件でのむわ。腐るほど隠匿資金を持つ好色老人は、すでに藍染美香というアップ系ハード・ドラッグのアディクトだから、そのクスリを得るための金に糸目はつけない……」

ムーディーなライティングが快いリビングは妖しい静寂に包まれている。

悦子のしなやかな左手が美香のバスローブの裾を割り、美香の右手が悦子と美香自身のサッシを解いた。熱くなった淫血の温度差はない。互いにノン・インナーだから、ハニー・トークを交え合いながらネッキング、ペッティングを愉しみ合える。

二人は執愛の伴侶と愛し合える幸せに酔った。

だが、美香の淫らな知恵はまだ冴えている。悦子のネッキングを受けながら、悦子の欲情をより深めるスパイスを忘れない。

「リビングだから、節度を忘れないでね」

直ぐにでも淫ら狂いしたい本心を偽り、反意語の無駄な釘を刺したが淫らなテンションの高まりを抑えられない。異様に発情した女身が股間に猥雑な隙間をつくり、悦子の手指を受け入れてペッティングへといざなった。スリットもすでに性蜜まみれだ。幾度、挿れられても美味しい悦子の二本の指を根元まで呑み込み込んで、キュツッと締めつけてた。

「もう節度の枷は外されてるわ」

「悦子の寝室ではないのよ。ここでは駄目っ」

「もう、私の指は美香の中なのよ。美香の性蜜でズルズルになった理性のブレーキは効かないわ。私の腿に跨がってっ。そして、私の中に指を挿れて……」

ソファの上で悦子と肌を合わさずに対面し、ネッキング、ペッティング、フレンチ・キス、あけすけなピロー・トークをからめ合うのは久しぶりだ。

『今深夜は、異常燃焼しそう……』

心底で不遜に北叟笑み、指を挿れ合ったまま馴れた動きでソファに深く腰掛けた悦子と対面した。悦子の挑発に呼応するように、膝を浅く曲げた両脚を開いて悦子の二本の指を銜え込んだスリットを晒し出し、美香より大きく裂いた悦子の太腿の間に自惚する桃尻を入れた。無論、悦子と同じように臀部を浮かし気味にし、相互ペッティングをスムーズにする配慮を欠かさない。

「無垢になろう……」

悦子のシュガーな囁きに、

「万が一、熟睡しているはずの魅希か奈魅が目覚めて、淫らな気配がするこのリビング・ルームに来たら、淫蕩な別貌を剥き出した私と悦子の絶対に見せたくない濡場を見られてしまう。バスローブを着けていれば、まだ女と女のまぐわいを知らない幼い愛児にはショッキングな濡場を即座に取り繕える……」

と答え、拒んだ。

「そんな危惧は無用よ。魅希と奈魅は熟睡しているわ」

「バスローブのフロントは乱れに乱れて、半裸同然だわ。かえって互いの火照ったエロチカな裸身がよりセクシーに映えるから、あえて脱ぐ必要はないのに……」

「そうね。脱ぐ、脱がない、でいさかうなんて無意味ね。でも、明日、萬田剛志と愉しむ三つ巴の性宴の前祝いを兼ねるメイク・ラブよ。中身を思いつきり淫ら狂いしたい……」

「その気になった悦子は怖い。昨夜のように、異常発情したタチになるつもり？」

「今深夜は、美香とタチとネコを交互に愉しみ合いたいの。先に、ハニー・ジョブでたまったストレスを拭って上げる」

悦子は美香のハニー・ジョブの中身を熟知している。隠す必要はない。「手玉にとった上客とのセックス・ビジネスではチップが高額だし、欲と

道連れの私も本音半ばで淫ら狂いしてアクメを貪るから、さほどストレスはたまってないわ」

「マァッ、ぬけぬけと……」

「プラチナ・タグがつくコール・ガールの生業は嫌いでないわ。特別の職能を持たない私の異能はセクシュアリティよ。ハニー・ビジネスでは、性快楽は淫蕩に愉しんでいかほどのもの、と割り切ってるわ。ハニー・マネーが介在するフェーク・ラブなのに、私のハニー・ビジネスで魅せるキャラ……哀愁な容姿が冴える未亡人との白日夢もどきのセックスに呆け、私の本音半ばの淫ら狂い、演技半ばのエクスタシーの表情と所作に魅入られるわ。私の本心を露ほども知らずに……」

「美香の相手の男が可哀想……」

「ハニー・ビジネスにその手の同情は禁物よ。金を稼ぎまくった高級ソープ嬢歴のある悦子らしくない台詞ね」

「分かっている。でも、源氏名・英田那弥こと藍染美香の怖ろしさは、禁断性の強いハード・ドラッグと同じね。哀愁なたたずまいで両性を魅惑する美香の性蜜の淵は底なしの蜜地獄だから、美香にとってはハニー・ビジネスでも、美香の虜にされた客は美香の淫牙の餌食にされて性快楽の美酒に酔い痴れる。英田那弥を抱きたいリッチな上客は、美香が限度とする三ヶ月前後で数百枚の万札をなくす構図が見えるようだよ。手練手管を労したら三ヶ月前後が倍に延びるかもしれないのに、三ヶ月前後を限度にする根拠は？」

「英田那弥、という禁断性の強い麻薬の真性アディクトになるからやばいわ。血迷った男が起こす痴情がらみのトラブルは願ひ下げよ。似非リッチな客は見せかけの豊かな懐が干上がって馬脚をあらわすし、理性を失った男はフェーク・ラブの見極めが狂って暴走する。反社会的なトラブル、血生臭いアン・アフェアーに巻き込まれるリスクが大きくなるわ。愛人関係を続けるオフィスのボス・小坂晃子の方針でもあるし、サックス・ビジネスと割り切っても濃厚な情交を重ねた上客に対して芽生える情愛の始末に困り、危険察知のセンサーが狂ってプロらしからぬアクシデントにまわれないとも限らない……」

「昨日の男も美香に執心してるのでしょ？分かっている、何となく妬ける……」

悦子のペッテングの密度が濃くなった。

「悦子らしくない台詞ね。他の上客と同じように、葱を背負った鴨よ。リッチ度はまずまずだし、色情の度合いもほどほどよ。気になる？」

「どんな男？」

悦子の睦言に含まれる奇妙な棘を感じた。

「小規模工務店の社長よ。取引先は先代から受け継いだ富豪家だから、高利益の仕事で相当儲けてるようだよ。当然、脱税で得る裏資金が豊か。付け焼き刃のリッチ族ではない。エロトマニアの別貌もママァだし、ポテンツ、セックス・スキル、タフなペ*スも並みを遙かに超えている。その上、美味しい女とのフェーク・ラブ、極上情事の高額対価を惜しまないタイプ、と読めるわ。入魂の蠱惑が功を奏したみたい。濡場で淫乱の本性を顕わにする私に、彼の理想とする隠れ淫乱像をダブらせてるようだよ。男に好まれる哀愁な容姿に恵まれた？女盛りの未亡人を自然体で演じられるから、その未亡人像とは裏腹な別貌……淫業を背負った妖婦の貌を顕わに

して情事を愉しめる。迫真のアクメの演技に本音がからんでしまう。ほろ苦い罪悪感を拭えないから心身が疲れるけど、私好みのエロトマニアが相手だと、本音もどきでエクスタシーに惚けられる……」

「マアツ、高級娼婦のプロの矜持を忘れたの。好みのエロトマニアのことを惚気るのね。本音を交ぜた不倫みたい。私に嫉妬せるなんて、腹立たしい……」

「プロの矜持を疼かせて、安全パイの上客に万札四〇枚相応の淫奔な情交を愉しませ、成り行きで私も淫蕩な本音を交えても罰は当たらないわ。この蜜の生業ならではの役得よ」

「居直りの台詞のように聞こえる。本当にいけない義娘……」

悦子の嫉妬心を煽る淫卑な意図を読まれたが、無情の伴侶との性愛行為も知恵を惜しむと惰性に流れる。

『いけない義娘を黽って……』

妖光を宿した眼差しで、馴れ合いを越える性折檻を求めた。

『淫魔に化ける義母のヨガリ責めが欲しいの？』

悦子は非親族なのに、亡夫とリンクしていた悦子との間には説明しがたい奇妙な義母娘意識がある。妖しく光る双眸で問い返され、悦子の意に応じて淫血が熱化した女軀をスムーズに入れ替えた。

ディープ・キスを交わし、見詰め合ったまま数呼吸の間をおいた。

「昨夜、二時間余りも、ネコになった私を痴癡にいたぶりつけてヨガリ地獄におとしたでしょ。そのお返しもしたい。私、美香の夫が亡くなってから挿れてる生身のペ*スは萬田剛志のクスリで強制勃起されたペ*スだけよ。ハニー・ジョブを生業にする美香は欲しいだけ挿れてるのに……」

「ビジネスよ。贅沢かもしれないけど、相手がりッチな上客でも私好みのタイプとは限らないわ。興が乗らない相手とファックする苦痛、自己嫌悪のやりきれなさを知ってるわ。万札とファックしているのだ、と自分を納得させてそれなりの淫ら狂いで交尾が白ける一瞬もつくらないけど、心身の疲れは計り知れない。かなり過去でも、セックス・ビジネスを生業にして蓄財した悦子はその葛藤を知ってるはずよ。極旨のセックスの対価を惜しまないりッチ男のペ*スは万札を幾重にも巻き付けたスティックだから不味くはないけど、悦子と愛用している賢い双頭のスグレモノの方がずっと美味しいことも知ってるでしょ」

「ウッフッフ、否定しない。二人だけの真夜中の性宴よ。愛用の双頭のスグレモノで愉しむ？」

「そのつもりでしょ。嫌っとはいわない。でも、拒んで、哀淑な彫りの小貌を夜叉面にした悦子に大股裂きに縛られて、強姦されるように黽られてみたい……」

「フン、欲張りな雌っ。でも、淫業を背負う二匹の雌のメイク・ラブにタブーはないわね。万札を弾む上物のエロトマニアに、聖域にするアナルを愛撫され、姦られたことがあるの？」

「悦子の阿呆っ。私の聖域のガードは堅固よ。一度もないわ」

「でも、りッチな上客の性嗜好は様々でしょ。アナル・マニアも……」

「一億の万札束を積まれても、そんな畜行は許さない。その傾向が窺える

男が超リッチな上客でも、二度とミートしない。リンクした私を庇護するボスに話して、マニア向けの高級娼婦クラブの女…… アナル・セック、SMプレイも厭わない女に代わってもらわ

「美香らしい言葉っ。自分のセックス・スタイルを固守するのね」

「名器を自負する悦子と私のケアが行き届いたアナルは括約筋が異様に発達しているから、アナル・セックス・マニアには垂涎の性交器官だと思うけど、私には永遠の聖域よ。三年余のソープ嬢歴を持つ悦子は、当然、アナル・セックスを体験したはず。私は好奇心旺盛でも、生理的に忌避するアナル・セックスはノンよ。未体験を通すつもり……」

「分かっている。今深夜も清潔に洗浄・ケアしてるわ。きわどい愛撫は許す？」

「愛撫の聖域は決められないから答えに困るわ」

「欠かさない習慣、ともいえるわね。でも、今まで、きわどい愛撫は許し合っているわ。強制排泄後に念密に滅菌洗浄してラブ・リキッドを潤沢に使えば、口姦とか指姦、ごく普通のアナル・バイブをスムーズにインサートできる」

「駄目っ、絶対に駄目っ。そんな悪魔の囁き、聞きたくない」

「禁断の麻薬のようなスグレモノではないのよ。多少癖になるけど、禁断性はないのだから、江戸時代の春画でも、刺激的なボリュームの双頭張形を挿れ合う女と女のからみが描かれてるわ。雄雌の生殖行為とは本質が異なる女と女のエンドレスな交尾の必須アイテムの一つよ。類別すれば、アナル・バイブも含まれる。セックスを愉しむためのアダルト・トイだと思えばいい。滅菌消毒を兼ねた潤滑油にするラブ・リキッド等の使用は常識の内。汚辱感を払拭してどう愉しむかは、淫らなセンス次第で大きく変わるけど……」

固有の性流儀を持つ悦子の魔淫な説得で、アナル・バイブへの拒絶反応に似た忌避意識を崩された。

『悪魔の囁きに似た睦言で、師事され、催眠された感じ……』

悦子と二人だけの秘密を共有するような妖しいときめきを覚え、内心を見透かされないように、違和感なく睦言の中身を変えた。

「悦子、もう私の亡夫との猥雑なセックスを忘れた？」

亡夫・藍染弘樹の異常と紙一重のポテンツと、タフなペ*スを思い出させた。

「時折、思い出すけど、もうレアな記憶ではないわ。不倫愛を実感するより、弘樹の妻の美香と弘樹のペ*スを共有する不埒な悦びの方が深かったし、疲れを知らないポテンツ、雌が悦ぶセックス・スキルは二重丸だったけど、もう過去形の記憶だわ。鬼籍に移った男と交尾めるわけではないもの……」

「随分、無情で、現実的ね。弘樹は、元々、悦子の男なのに……」

「飼っていた弘樹を愛人の美香の夫にしたのは、私の男というタグをつけられた弘樹を美香と合意で共有するための奸計だったのよ。単細胞？の弘樹は、美香と私の愛人関係を露ほども知らずに他界したけど……」

「ウフフッ、知らぬが仏、の故事通りね。弘樹は、私と悦子に、知る不幸より知らぬ幸せを選ばされたのよ。婚姻後、弘樹は、不倫関係に様変わりした悦子との情事を存分に愉しんでいたわ。緻密に気脈を通じる悦子と私の密なるサフィズムも不倫愛に様変わりしたから、悦子と酔い痴れる背悦

の美酒の味わいはより濃厚になったわね。私と悦子のサフィズムに無知だった亡夫のタフなペ＊スを思い出すと、種馬として機能した男で魅希と奈魅の父親だから、多少の罪悪感を覚える……」

「フーン、嘘っぽい感傷ね。弘樹の交通事故死で、愛しい分身……魅希と奈魅を得ていた美香は、彼の事故特約付きの死亡保険金等を得てこのマンションを相続したけど、私は六年余も飼っていた弘樹の死で何も利得しなかったわ」

「損得勘定をするなんて、薄情ね。元々は悦子が飼っていた男よ。リンク歴が長い弘樹の死を悼まなかったの？」

「ウーン、マンネリ気味の実りのない情愛関係に終止符が打たれて、内心でほっとしたわ。所詮、私にとって弘樹は性快楽の具に過ぎなかったのかもしれない。美香はどうだったの？本音を聞かせて……」

「不遜だけど、本音では奇妙な安堵を覚えたわ。心身が同化したかのような伴侶は悦子だから、はっきりいって愛が褪せた夫の存在が何となくとましくなっていたし、影の存在でも頼りになるはんなり奸婦・悦子の後ろ盾があったから……」

「種馬として機能した夫・弘樹を過去形の男にしたかったのね。魅希と奈魅の父なのに薄情な雌……」

薄情、という語句は悦子にも使える。

「悦子の方がもっと薄情よ。長年、弘樹に性奴もどきの首輪をつけて性快楽の具にさせていただいて、初めから彼との本物に見せかけた疑似愛はセックスをより美味しくするための香辛料にしていた。筋金入りのはんなり奸婦の本音を読めなかった弘樹は、悦子との性繋を本物と信じて疑わなかった。そして、悦子と私の秘めやかな愛人関係に気付かなかった無知ぶりは滑稽を越えていたわね。当然、弘樹の性に食傷して飽きがきた悦子の本心を読めなかった。悦子の男は自分だけだと思い込み、悦子の金脈になっていたパトロン・萬田剛志の存在を知らなかったのがいじらしい……」

淫忍な台詞を囁いた。

「美香の言葉を否定しないわ。無論、弘樹の不慮の交通事故死でショックは受けなかった。弘樹のペ＊スはタフだったけど、クスリでポテンツを得て老獪性豪・萬田剛志の巨凶なペ＊スの方が挿れ応えがあるわ。二十六年余、自らの血を継ぐ嫡女とインセストを続ける鬼畜男、性獣男の色情狂ぶり、呪わしいほど練熟したセックス・スキルは弘樹よりずっと格上よ。疎ましくなった弘樹の存在がなくなればいい、と密かに念じていたのかもしれない。金の生る木の大富豪男の年齢は関係ない。彼を老熟性豪にする薬物使用も無関与の立場で容認する。ヘドニズムの美酒より旨い酒はないのだから……」

「悦子の不埒な欲望は、老熟色情狂……元経済界重臣の富豪・萬田剛志に見初められる幸運を掴み、思惑通りに具現したのね。金脈になる萬田剛志との出会い、パトロン&情婦の蜜愛関係に至るプロセスは詳しく知らないけど、彼とのラブ・ヒストリーは幾年前から？」

「六年余前になる……」

「相応の報酬を得て、相応の蓄財を……」

「老熟性豪に偏愛される情婦役の中身はハードよ。異常と紙一重の性欲を充たしてきたのだから、当然の報酬になるわ。萬田剛志と近親相姦を続け

る嫡女・萬田律子のことを初めて話すけど、彼女は萬田剛志から旧家・名門・超富豪家の覇権を名実共に継承した萬田家の女当主なの。絶対君臨の女君と私の性関係は、私がソープ嬢を生業にしていた初期から絶えてないわ。私を店外で買って淫奔に遊ぶセレブ女性の一人で、大富豪の嫡女、実父のペ*スを挿れている鬼畜女だとは知らなかったわ。でも、私が彼女から得るハニー・ギャラは桁違いに高額だった……」

「バイセクシュアリストの萬田律子は、どちらかといえば同性愛指向が強芯髓に麻薬を染み込ますような手練手管に籠絡されない好色女はいないわ。当然の成り行きで、パトロン&情婦の関係が構築された……」

「私が金脈を得たプロセスが読める？」

「およそ読める……」

熱い性蜜の坩堝と化したヴァギナの奥が疼いた。

「悦子を色情狂老人・萬田剛志の情婦に仕立てたのは、彼と近親相姦でリンクした嫡女・萬田律子なのね」

念を押した。

いのね。その気になった悦子の

*タイトル>蜜三昧(2) *章>琥珀彩の知恵(2)に続く。

